

全ての方々が縄文柴犬の存続にかけて来られた意味を十分に理解しているわけではありませんが、小生も縄文柴犬を是非存続させたい、と願っている一人です。

縄文柴犬は、すばらしい犬だと思います。「犬らしい犬」といいますと、「犬の差別」になりますので、あまり強調したくありませんが、ザーと以下のようなことに気づいています。

- ①犬が野生動物から「犬」になる過程で、人工的な加工を加えないで、犬になった感じが非常に強い（ブルドックなど多くの改良種の犬は、出産に帝王切開しなければならない。自然の営みとしては、まったく不自然です。）
- ②山野を駆け巡る縄文柴犬は、躍動感にあふれ、本来の持っている特性を余すところなく体現している（室内犬からは想像できません。室内で愛玩犬を飼育されている方は<これでは困る>のかも知れませんので、これ以上はやめます。）
- ③粗食に十分に耐え、自らの力で天寿を全うできる能力を身につけている（コリンは、草の根を掘りだしてかじったり、冬眠から目覚めたばかりのカエルを捕まえたり、それはそれは興味が尽きません）
- ④加えて、長い年月に蓄積されてきた「人間と犬の主従関係」を会得している。

これは、他の犬との関係にも反映され、「犬同士」であれば、常に沈着を保ち、風格を備えている（先日、散歩に出かけたところ、キャンキャンとなく犬に出会いました。このときは、未だ小生の綱に繋がっていたコリンですが、しばらく小生に身を寄せていました。キャンキャンのご主人は、あまり気を使われない方のように小生たちの方に近づいてきました。至近距離になった時です。キャンキャンがコリンにちょっかいをかけました。途端に、コリンは小生を一瞥するや歯をむき出し、キャンキャンに猛然と立向かったのです。キャンキャンは、途端にキャンーン・キャンーンと後退です。面白いものですネ。（犬の年齢から考えるとあり得ないことのようにですが、「壮観」でした。）

2014.04.04

